38

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2010年12月30日 14：41：05

入館証番号：

＜請求票＞
Call Slip

361.5
5048
1941

資料名：日本文化の特質

巻次　：

著者名：國際文化振興會 // 著
出版者：日本評論社　頁数　：435p
大きさ：22cm　出版年：1941.11

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/261 中)2F社会(閉)
資料ＩＤ　：5001716479

一 社 人 自 東 新 ↓ 一 社 人 自 東 新	力	事
	請求	報告

MB１	ﾏｲｸﾛ	B1	ｱﾙﾌｧﾍﾟｯﾄ	原紙	縮刷	
MB２	ﾏｲｸﾛ	B2	洋	中	朝	

行	1F	B1	B2		
多	児	青	1F	B1	B2

切り取り

2010年12月30日 14：41：06

入館証番号：

Call Slip

＜請求票＞(控)

書名
資料名：日本文化の特質
巻次　：
著者名：國際文化振興會 // 著
出版者：日本評論社
出版年：1941.11
大きさ：22cm
頁数　：435p

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/261 中)2F社会(閉)
資料ＩＤ　：5001716479

請求記号
361.5
5048
1941

目次 P.1～3

本文 a～51

序文

紀元二千六百年の奉祝記念事業として財團法人國際文化振興會が、內閣祝典事務局、文部省、外務省、情報局等の援助の下に計畫した日本文化に關する國際的懸賞論文募集事業は、昭和十四年秋から世界的動亂と云ふ最も惠まれざる條件の下に行はれたにも拘らず、幸に朝野內外各方面の絕大なる後援によつて周く國外に知られ、應募論文五百二篇と云ふ豫想以上の好成績を以て昭和十五年十一月三十日に締切つた。爾來審査員土居光知、長谷川萬次郎、田中穗積、田中耕太郎、辻善之助、桑木彼雄、矢代幸雄、小泉信三、宮嶋幹之助、新村出、及久松潛一の諸氏の嚴密な審査を經て、昭和十六年四月二十九日天長の佳節を卜して一、二、三等計三十九名の入選者を發表し得た事は本會の喜びとし又誇りとするところである。

本會は之等入選論文の全部を原文のまゝ刊行するが他方「日本文化とは如何なるものか」と云ふ大きな題目を把へて外國人が發表した論說が必ずやわが國民自身の反省又は向上の爲めに資する處あるべきを信じて今玆にその一等及び二等當選論文の邦語譯を刊行することになつたのである。

本書には彼等の理解の程度、見解の相異に基く缺陷、速斷等も敢て加筆訂正を行はずそのまゝ發

表した。誤謬も亦吾々の參考資料であると思つたからである。

卷末に本事業の經過報告並に應募論文の下審査に當つた本會囑託稻垣守克氏の概評を記し、論文に現はれた一般的傾向並に本論文募集事業の結論を明かにした。

本書の編纂刊行を快諾せられた日本評論社に對し深甚の謝意を表すると共に審査委員及飜譯者諸氏並に、稻垣守克氏の勞を深く多とするものである。

昭和十六年七月

財團法人　國際文化振興會

目次

序文

一　日本文化の特質〔第一地區（日本國內）二等〕……郭　弘　歷（滿洲國）一

二　日本文化と支那文化〔第二地區（アジア）一等〕……梁　盛　志（中華民國）一七

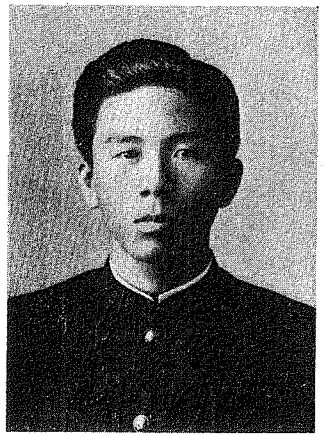
三　日本道德〔第二地區（アジア）二等〕……郭　道　瀞（中華民國）三五

四　印度人の見たる日本文化とその特性〔第二地區（アジア）二等〕……サクマル・ダット（印度）五三

五　世界に於ける日本文化の位置〔第三地區（歐・濠・阿）一等〕……パーリ・シャーンドル（ハンガリー）八一

六　日本文化の特徵〔第三地區（歐・濠・阿）一等〕……フランツ・メルケル（獨逸）一〇一

七　日本の國家生活の基礎〔第三地區（歐・濠・阿）二等〕……エチエンヌ・ベンケー（ハンガリー）一一九
八　澁味〔第三地區（歐・濠・阿）二等〕……ルドルフ・ヘッケル（獨逸）一四一
九　名譽の國〔第三地區（歐・濠・阿）二等〕……ゼイ・ジヤンネイ（佛蘭西）一六五
一〇　日本文化の特色〔第三地區（歐・濠・阿）二等〕……アーサー・ラッセル（濠洲）一九一
一一　世界に於ける日本文化の地位〔第四地區（中南米）一等〕……アダルベルト・ガルシーヤ・デ・メンドーサ（メキシコ）二二五
一二　日本文化文明の獨有的性質〔第四地區（中南米）二等〕……ジョセ・サンタンナ・ド・カルモ（ブラジル）二六五
一三　日本音樂の歴史とその特性〔第四地區（中南米）二等〕……スジ・ピエダーデ・シャーガス・ニション（ブラジル）二九三
一四　日本人の文化的貢獻〔第五地區（北米）一等〕……アルフレッド・ジイ・フィスク（アメリカ）三三
一五　日本人の精神的並に文化的特徴〔第五地區（北米）二等〕……シドニイ・レウイス・ギューリック（アメリカ）三五五
一六　文化の日本〔第五地區（北米）二等〕……ヘンリイ・ジュエット・ファーバー（アメリカ）三七七
附錄
日本文化に關する國際懸賞論文募集事業報告……四〇三



第一地區（日本國內）二等入選者

郭　弘　歷

滿洲國奉天省の人、年齡三〇歲。旅順にて教育を受け、東京高等師範學校を經て本年京都帝國大學經濟學部に入學、東亞學生聯盟や、興亞青年聯盟の滿洲國代表として活躍した。

日本文化の特質

一

文化は必ず民族文化である。文化は精神の所産に屬する。それで文化と民族との關係は文化と民族精神の問題でなければならぬ。文化は民族精神の表現である。

民族精神は風土的自然環境の中に生成されると共に、文化的傳統の中に育成されるものである。吾人は民族精神を考察するに當つては、その歴史的發展と精神的本質との兩方面を問題として取扱はねばならぬ。

民族精神は民族の文化を形成しつゝしかもその文化に形成されるものである。民族精神は古代に完成したものではなく、文化と相卽不離の關係を保ちつゝ、歴史的に絶えず發展して行く。古代の民族精神は中世にも近世にもまた現世にも存續してゐる。併し乍ら古代文化と中世文化とはその樣式が異なる如く、民族精神も時代と共に異なり、發展の段階が存するものである。

併し民族精神がその古代、中世、近世に應じて異なる樣相をとつたことは、その奥深い根底に不變不易のもの永遠に渝らざる本質的なものがないといふことを意味するのではない。

各時代に互に相異した文化を形成し發展したが、それでもそれらの根底には何時も不變的な或る民族精神の特質が

相變らず流れてゐた。

吾人は日本文化の特質を學的に解明せんとするに當つて、その民族精神の歴史的發展に於ては絶間なく前進するものなると共にその間には不變の永遠的なものがあることをしつかりと捉へねばならぬ。學としての精神史や文化史を探究するには生々發展の樣相から不變の精神的本質を見、不變の精神的本質をその發展の中から把捉せねばならぬ。

日本民族の精神的活動の史的發展はその神話の開闔起伏の中に之を捉へることが出來る。吾人は日本神話を以て日本古代固有の文化とし日本文化の源流とし不易の根本精神として把捉したい。

少くとも古史神話の關する限りに於ては、古代日本民族の精神的活動は二つの焦點に集中してゐる。その一は國家であり、他の一は國家統治の主體である。彼等は個人としても集團としても常にこの二つのことを思念したのである。こゝに古代日本民族の精神活動の顯著な特異性がある。

日本民族の祖先は宇宙の創成を觀ずることは甚だ粗略で、國家の生成に對しては精密であつた。彼等の關心は超國家的なるものに集つたのではなくして、宗教的政治的に特別に意義づけられた己等の國土に對して燃え立つてゐた。このことを「國產みの神話」にそれを看取することが出來る。

その上に、古代日本民族は他の民族と異つた國土の觀方をした。諾冉二神は大八洲を產むと同時に天照大神を產み給うた。日本民族は統治せらるべき國土と、それを統治すべき責任を背負うた者とが父母を同じくし血を分け合つた同胞でもあつた。彼等の國土に對するかうした精神、理念がやがて天照大神の御孫瓊々杵尊に與へ給うた宣言「此の豐葦原水穗國は、汝知らさむ國なり」（古事記）また「豐葦原中國は吾が兒の王たるべき地なり」（日本書紀）を力强く活かしてゐる。

古代日本民族の精神的焦點の他の一つは國家統治の主體である。日本古代民族は國家統治の權威の中心が何故に天照大神の御子孫に歸すべきかを思念した。その思念はこの統治せらるべき國土と、この國土を統治すべき權威としての天照大神は血を分け合つた存在態であると考へた。第二に彼等はこの唯一の權威の中心への結合といふことを己等の存在の根本原理とした。この思念は記・紀神話に於て明かにその全體的構想が顯現してゐる。この神話の全體的構想は皇室の神聖な「しらす」の約束的、天命的權威であり、民族がそれによつて求心的に調和的に集中し組織せられてゐることである。記・紀神話の全體的構想が皇室を中心とする諸民族の求心的集約的形態をとつてゐるのは、日本民族にのみある特殊な「歴史を要求する心」が意識的に個々の神話とその繫りを制約してゐたからである。

這般の「歴史を要求する心」若しくはより根本的に「國家統治の中心に結集する思念」は日本神話に於てさまざまに具現してゐるが、そのやうな要求や思念の實際的具現を與へたのは要するに、一は血緣的結合であり、他は精神的結合といふ二つの大きな理念の現れ方に歸着する。第一に古代日本民族は國民を構成してゐる一切の民族が統治主體としての皇室と直接的に若しくは間接的に血緣關係で結びついてゐると理念してゐる。神話に於て、出雲系民族の首祖素戔嗚尊を天照大神の弟と觀じたのはその一例である。古代日本民族はかうした神話を通じて政治的權威の中心に向けての國家の求心的な關係づけを「しらす者」と「しらされる者」との血緣的結合に求めてゐる。第二に古代日本民族は「生活の爲方」を國家統治の中心への天命的奉仕に於て理念したのである。天孫瓊々杵尊は天照大神の仰せによつて、天上國家を範型とする地上國家を大八洲に建設すべき大使命を背負うて大八洲に降臨し給うた。而して大八洲は大神と血を分け合つた存在である。この大使命は正しく天命的であり約束的なものである。そして古代民族は、さうした大使命を帶び給うた瓊々杵尊の御子孫或は親しく尊に隨從し奉つた神々と直接的若しくは間接的に血緣を有

するものであるとすれば、その生活は天命的、約束的に國家統治への奉仕でなければならぬ。こゝに日本民族の「生活の爲方」の理念がある。そしてこれが日本神話の全體的構想としての「皇室を中心とする國民的求心的集約」の他の一つの樣態をなしてゐる。

日本神話は絶えず流れてをりしかも創造的な流れである。創造をなしつゞけるには絶えず新しい神々が舊き神々と交替した。しかし創造をなすものは常に「天神之御子」と呼ばれてゐる。そこに變化してしかも變化せざるものゝ第一觀想が現はれてゐる。同一の觀想を示す第二は更に民族精神のより重要な形相を閃めかせてゐる。新陳代謝する神神は、外的表現に於ては各々別個の存在態であるが心靈的には全く自己同一的な存在態であるといふ觀想である。このことは瓊々杵尊等の神話に於て最もよく看取せられる。

日本のこの國家神話は日本民族が民族であると同時に、國家組織をもつ自覺的な國民であることを示してゐる。そしてその國家組織が神裔である天皇を主權者として戴き天皇の國家統治は神意に基きそれが萬世一系の永遠性を有することを物語つてゐる。

二

民族精神が風土的環境の中に生成するから、民族精神に風土的性格があるのは當然のことである。日本のやうな島國的、溫帶的で季節の變化が微細、自然の景觀の多樣な所と、支那の如く大陸的で、季節の變化が粗雜で、景觀の壯大な所とでは、民族の感受性や構想力は自ら異ならざるを得ない。こゝに風土が文化の性格を制約することは極めて自然の事柄に屬する。日本文化の日本的性格はその風土の中で養はれてゐることは確かである。故に吾人は日本文化の特質を解明するに當つて日本の風土的自然環境を重視する所以である。

ひとり風土のみでなく、國土の位置、自然の地理情況も國家の性格を規定するものである。日本の國家觀念、國家組織は國土の狀況によつて卽ち島國であるといふことに可なり基づいてゐる。單に日本古代文化のみならず一般に日本文化は島國的性格が基礎を爲してゐる。

併し日本は大海の孤島ではなく大陸に近く交通は絶えず持續せられ、大陸と經濟的技術的文化的交渉が常にあつた。このことは日本の民族性に特殊な性格を齎したと考へられる。交錯する暖流と寒流とに挾まれ、火山や地震が多く、颱風が繰返されて、極めて複雜多樣な氣象、風土、景觀を呈してゐる。四面海に圍まれたる鎖國的である日本はその中に自ら共同の祖國意識が養はれ愛國心も富んでゐる。と共に地上に他國家と國境線を接して對峙することがないから排多的國民意識は成立しなかつた。それで日本人は極めて平和的であり決して好戰的ではない。

これと全く同樣に日本文化の精神にもこの特殊性格が現はれてゐる。日本は外來文化に對しては常に寛大的であつた。常におのれを空にして外國のより進んだ文化を攝取した。そのことは外來文化の優秀なることにもよるであらう。併しこゝに注意せねばならぬことは日本人が他の文化を吸收する態度である。全く自己の固有文化を捨てゝしまつた歐羅巴人と、自國文化の持續にあまりに保守的である爲容易に他文化の攝取抱擁を許容しなかつた支那民族とは全く異つてゐる。日本には固有文化が多分に持續してゐる。特に國體意識や國家觀念や神道信仰には殆んど外來文化の影響を受けなかつた。日本民族は他文化を絶えず吸收しながら常に自己固有の文化を永遠に保持しようとする。このことは日本が外來文化の攝取に當りそれに同化される危險を免れた最大の原由である。と共に日本文化を久遠に創造的に生々發育進歩せしめた原動力でもある。日本に於ては國體の神國意識がいつも他文化の攝取と受容との原理となつ

てゐる。この事實は外來文化の受容なるものが日本精神の特性に基いて成立することを示してゐる。

三

吾等は世界の諸民族がそれぞれに屬すべき、若しくはそれぞれに示した世界觀の中、特に代表的な模範的な基本型式を三つに列擧することが出來る。

その三つとは卽ち「人間論的世界觀」、「超越神的世界觀」、「宇宙論的世界觀」である。この三類型はそれぞれに歐米人文化に屬する世界觀、ユダヤ人文化に屬するもの、及び東洋文化に屬するものとして論ずることが出來る。日本民族はこの宇宙論的世界觀に卽し、しかもその模範的なるものであると考へられる。

人間論的世界觀は歐米文明が示した如く、主觀論であり相對論に墮したのみでなく、個人中心の功利的社會觀を導いた。それに對して超越神論的世界觀は、かのユダヤ人の社會相と中世のカトリック思想が示すやうに、一神論の徹底さはあつても、現世を無意義なものとし、人間に對して超越的で、現實の生と個性の否定を歸結した。しかるに東洋の宇宙論的世界觀は獨り神人の合一をその基底に置くのみでなく、この兩者の根底に究極の實體的なるものを認め、主觀論と超越論、實利の國と神の國、最高神と現存在の根源的一致と觀じる。あらゆる存在にその各自に唯一なる個性の姿に於て、その根本的なる融合と調和をもつものとする。あらゆる現在に於て永遠なる意義を見、現世を否定するのではなくして煩惱に卽する菩提を行を通じて實現しようとする。

東洋的世界觀から成立つ日本的世界觀の根本特質はその國家的一體的なる點に存すると思惟せられる。その宇宙論的なることは民族とその個性が國家に於て實現し發揮せられることである。けれども古來から東洋の印度や支那に於ては國家の形成にその眞義は發揚せられなかつた。吾等は世界に於て日本民族の建てた國家は著しくその精華を顯現し、より模範的であると謂ひ得よう。日本では個人的利己の操作を主とすることなく、異民族の壓迫搾取を受けることもなく、個人や階級の對立することなく一體的意識で國家的に集約し、打つて一丸となつて自國の運命を支持し未來永劫に向つてその發展を保ち來つた。日本人にとつて國家的ならざるものはなく、國家的なるもので一體的ならざるはない。この一體觀によつて神人一體を齎し、この神はその血を繫ぐ現實に於て働く力となり國を護る力とさへもなる。

神は根源的なるものであり、生產的なるものとせられてゐる。そして生產するものと生產せられるものとの間に自由なる個性關係を許容しつゝ、しかも飽くまで連續的な傳統の關係をもつ。この生產的連續的特質は自然國土さへ神によつて生れ、土と血との根源的融合の上に日本民族文化を生成する具體的基礎となつてゐる。この生產連續こそ永遠の原理として保持され、その歷史の過程中に於て非連續的なる革命を絕對に許容せぬ國運が運命づけられてゐる。その產む事こそ、それぞれにその個性的意義を認め、他文化を抱擁し綜合し國家的に體系づけてゐる。古來日本民族の外來文化に寬大なる態度も亦これによるものであつて、しかも毫も自らの中心を失はず、包攝するものをば自らの原理によつて再組織し新たなる意義に再生せしめるのである。

四

世界は民族と民族との交涉から成立し、文化の世界は民族文化と民族文化との交流から成立する。民族文化は常にこの新たに成立した世界に於て新に成立して行く。民族が世界の成員となり、民族文化が世界文化の構成要素となる

とき、益々自己の個性を發現し、その民族精神は他に對して著しく自覺する。と共に、世界的理想を感受して、益々世界性をもつ民族文化を構成する。それで民族文化は民族性を持つと同時に世界性をもつのである。

日本文化の歴史的に於ける發展を考へるとき、日本文化の發展史は、日本が同時に世界であるといふ古代文化を除き、次の三期に分けて考察することが出來よう。第一は亞細亞の世界に直面して新たな日本文化を形成する時期である。この中から吾等は古代の王朝文化、中世の武家文化、近世の庶民文化とを區別することが出來る。第二は歐羅巴の世界に直面して新たな日本文化を形成する時期卽ち明治大正の時代である。第三は歐羅巴的世界が崩壞して世界的世界の文化が建設せられ始めた現代である。それで吾等は日本文化の發展を五時期に分けて考察せねばならぬ。

こゝに敍述の餘白が少き爲、それらのことを省略するが、たゞこゝでは日本文化史の發展に重大な役割を演ずる日本國體と日本文化の發展との相關々係を考究し、歐羅巴的世界の崩壞に直面して世界文化の建設に關しては、日本文化の世界史的使命と聯關を保ちつつ最後の「六」に於ける現代日本と世界のところに於て之を論じようとするものである。

日本國體は、之を法律的に言へば古來から世襲的君主政治の國體であり、尙現に立憲君主政體である。法律的意義と別に、日本國體と云ふ語は倫理學的或は哲學的のものであり、一言に言へば國家の性格といふことである。性格であるからそれは理想化して行く事實であり、實現さるべき理念である。而して日本國がすべての文化國に比して持つ特殊なる性格は上に萬世一系の天皇を中心とする家族的國家であることにある。隨つて忠本主義をもととする忠孝一致が國民道德の根幹である。而して日本國家のこの性格卽ち國體は太古にその淵源を有し、その文化發達は大陸からの儒教文化と佛教文化に見られたことは前に敍述した如くである。思ふに一方に外國の優秀文化に接しつぎつぎに學習した謙虛さと寬大さと、よきものを求めて止まない熱意こそ日本文化を發展せしめた原因であると共に、他方に毫も外國に屬從關係を結ぶことがなかつたのは固より、些かの侵害をすら受けなかつたのは、日本のその儼然たる國體の存在が最大の理由である。加之、一層積極的にも、日本文化のかゝる發達に國體の關與するものが少くなかつた。けだし日本國體が別に特定した理論も主義もなく極めて自然的なるもので、彈力性や適應性に富んだことこそはよく外來文化の優秀なる價値を受容し得たのである。殊に日本ではその國家の活きた統一原理として皇室がましましたことは革命の恐れもなく、革新が絶えず行はれ、しかも外來文化を攝取する時に皇室がいつもその第一先頭に立たれたことは極めて意義の深いものである。儒教、佛教の場合もいづれもさうであつた。明治以後に於ける西洋文明の輸入の場合でもさうであつた。

五

吾等は旣に日本文化の發展進歩の中に永遠不動の中心をなしてゐる根源的なるもの、中核的なるものを見、更に日本文化形成に特殊の民族性格と制約を與へた島國的環境及び日本的世界觀を考察し、更に日本文化の歴史的發展の樣相を極めて簡單ながらも概觀したので、次に日本文化の特に模範的なる基本型式を見出し、その類型的特性を明かにしようと思ふ。

歸一性　日本文化の全般を通觀して吾等の注目を引くものはその歸一性である。日本民族が太古より祖先崇敬といふ信念を堅く持續し、この信念こそ始終一貫日本文化の特質たる歸一性の原本的中心をなしたのである。古代の日本國家の指導原理は唯一的なるものであつて、それは卽ち崇祖敬神といふことである。祖先は日本民族の自身の肉體の

由來した根源であり。生命と共に祖先から受けてゐる。彼等は死して肉體は滅亡し、精神は消失することなく御魂となると信じてゐる。そして祖先を自分の直接的なる關係者として日常生活のあらゆる方面にその庇護を受けてゐると考へる。彼等が幸福なる生活を希求し、それを可能ならしめるものは祖先といふ神のみが直接に關係してゐると確信してゐるからである。それで祖先を神として崇敬し、この祖先崇敬の指導原理は經濟、政治、思想、文化等のすべての方面に滲み貫いてゐる。日本民族の祖先はこれに導れて生れて働いて死んで行つたのである。この祖先崇敬の生活は自ら神道と連繫してしまつてゐる。例へばそれが經濟と如何に關係づけられたか。古代人の最も重大なる產業は農業であつた。農業は大自然の運命に順應してのみその所期の目的を達成せられるもので、古代人はそれに對して全く畏敬の念に打たれてゐる。日本の國土は前にも述べておいた通り、惠まれてゐたが、それでも颱風は毎年この島國を襲ひ、雨量が過不足したりして、この風雨の影響は農業生產に及んで、必ずしも順調なものではなかつた。古代人はその天災を未然に防ぐには何時も祖神の御力を仰ぎ、毎年二月に祈年祭といふ行事を虔誠に行ひ、それが國家の政治的行事として擧行された。農業に天照大神が直接に關係し、あらゆる天然資源は大神の御力によつて開發されてゐた。更に水や風を司る神を祭つて風調雨順を祈念し、新嘗祭等の儀式は國家的に重大な祭典であつた。かくの如く、祖先崇敬は國民の經濟生活に重大な關係をもたしめたのである。政治に就ても、祭政一致といふことが最もよく之を表はしてゐる。それは日本政治の特質で日本政治史はこの特殊的色彩を具現し、それが今日の日本政治に於ても全く同樣に持續されてゐる。思想方面に於て神道はそれであり、それは決して宗教でないことに注意せねばならない。國民道德に就ては、臣道であり、それは敬神と忠君である。天皇は神格であり、現人神でありしかも君主でもある。この敬神と忠君は二にして一、一にして二である。文學美術に於ても古典文學の中に崇祖敬神の精神は美しく現はれてゐる。

この祖先崇敬の指導原理は一の風俗習慣にまで形成せられ、それが永遠に歷史を貫いて行く、それが又後に外來文化の繼承攝取の基本原理となつてゐる。

重層性　日本人は文化の固有的なるものを多分に持續してゐる。特に國體觀念や國家意識や神道信仰は殆んど他文化の影響を受けなかつた。日本は外來文化を受容しながら常に自分自身のものを保持しようとする。日本に於てはその國體の神國意識は常に他文化を批判し輸入の原理となつてゐる。この點で日本民族は外來文化に決して寬大ではない、この事實は外來文化の受容は日本の文化精神の特性に基づいてゐることを示すのである。こゝに日本民族の文化的精神が一面進取的、開放的でありながら、同時に他面に保守的、封鎖的であるといふ性格がある。そして日本に於てこの進取的と保守的とは決して矛盾しない。論理的に矛盾する如く見えるこの兩方向がいつも調和する所に日本人の精神生活の特性がある。政治的に復古的と進步的とは常に兩立した。改新や維新には常に復古意識を伴つてゐる。現に昭和維新の歷史的革新を招來しようとする近衞內閣の『新體制』にもやはり同一の精神が働いてゐる。神祇官と太政官とは同時に並存し、神社と寺院とは同時に並存し、神壇と佛壇とは同時に並存し、和文と漢文とは同時に並存した。舊きものと新しきもの、固有のものと外來のものが同時に存することは、衣食住を始め日本人の日常生活の至る所に見られる現象である。文化の重層性は日本に於ては獨自な意味をもつてゐる。そしてこのことは日本人の民族精神が主知主義ではなく主情主義であることを現はしてゐる。

簡潔性　中世社會に武士的體驗によつて形成された大乘的な新佛教は、日本的な簡潔性の一事から理解することが出來る。或は稱名念佛に、或は唱題成佛に、或は樹下石上の打座に、極めて簡潔な入信解脫の道を說く。新佛教が凡て精緻な教理を止揚して大乘佛教をこゝに凝結せしめ、かゝる形式をとる佛教のみが發展したことは直接的簡潔性を

生命とする日本精神に基くといはねばならぬ。日本藝術方面に就て考察すれば、吾等は能樂や茶の湯や俳諧の如き中世藝術を代表として、一般にその中世文化の中に最も明瞭にこの象徴的簡潔性を見出すことが出來る。日本の自然や風土はその模樣に於て複雜であり、日本人が自然に對する感情は纖細であり、感覺は鋭敏であり、これが島國的性格の短小性との交錯する所に簡潔性が成立したのである。この簡潔性は日本文化一般の性格を形作つてゐる。打てば直ちに響く如き簡潔性、磨きのかゝつた珠玉の如き簡潔性、これは日本文化のもつ獨自な性格である。

現實主義　日本古代の神話や宗教を見ると彼岸を希求する心はなく、靈と肉を分ける思索はなかつた。その中にある高天原は神々の住む世界であり、よみの國は暗い汚い世界と考へそれが現世の世界と同じやうに考へられてゐる。古代の日本民族は非常に樂天的であり死して靈魂が彼岸の世界に行くことは知らず、たゞよみの國を暗い汚いところとして死を嫌つた。後に現世無常や罪業を說く非現世主義的佛教が入つた後、直ちに日本の現實主義的精神によつて佛教を現實化した。そして悉皆成佛の大乘佛教の理念は現世卽佛土や國土成佛の信念に至つた。日本古代人は現世を離れた彼岸の神國の意識を求めなかつた。これを求めたのは寧ろ現世の神國であつた。日本の神國意識はこゝに存する。日本人の現實の觀念は實は宗教的である。日本の政治は本來に宗教的である如く、日本の現實主義は國家國土の宗教的意義と結びついてゐる。こゝに日本の現實主義の特性があり、日本の宗教意識の特性もある。日本人にとつては神の裔孫たる天皇の治しめすこの國以外に神國はない。日本の現實主義は常にこの國家意識に結びついてゐる。現實主義は日本民族の基本性格である。

六

最後に、現代日本と世界に就いて、日本の世界文化史上に於ける使命を考察して吾等の所論を結ばうと思ふ。現代の日本は二つの點に於て轉回に逢着してゐる。一つは明治大正の近代文化の行き詰りであり、二は日本文化と西洋文化の對立的自覺である。日本は元來二つの近代を持ち、一は德川時代であり、二は明治大正の時代である。この二つの近代は、一面から考察すれば、それは連續的に文化の發展が行はれ、それが明治大正時代になつて行詰つたと見る事が出來る。この點に關して近代の日本も近代の西洋と同じである。併し他の一面に於て、德川時代は日本文化の亞細亞世界に於ける日本文化の發展であり、こゝに日本文化と西洋文化の對立がある。しかも日本文化と西洋文化との綜合的並立は新たな世界に直面した日本にとつて、現代日本にまで進んで來た躍進にとつて、それは必然的徑路であつた。それは殊に西洋の機械的技術文明は日本文化にとつて著しい重要な意義がある。

それで日本近代文化の內面的行詰りと、それの西洋的文化への對立は何らかの形で解決の方向を求められつゝあるのである。

現代日本は國體觀念の自覺が著しく、それと共に復古意識が伴つて成立してゐる。と共に、世界的なものと必然に結合せねばならぬ運命にある。このことは日本の過去の歷史に於ていつも明示されてゐる如く、革新の現はれる度每にいつも國家的自覺と世界的理想とが結合したのである。現代日本に於ける日本的と世界的との對立は日本が新しい世界に直面したことを物語るのである。

交通通信の著しい發達の爲めに世界はまことの統一的なるものとなつた。しかもそれは歐羅巴的世界であつて決して世界的世界ではなかつた。この近世の統一的世界が成立したとき、東亞に一大運命が襲ひかゝつた。それは亞細亞が歐羅巴によつて發見せられたことである。東亞は歐羅巴の植民地たるべきであつた。かくて印度は植民地となり支

那は半植民地化し、日本も植民地化せられようとした。これが歐羅巴人の東洋政策に貫通する基本的思想である。この東亞の植民地化を防止して力鬪の端を開いたのが日本であり、日露戰爭の世界史的意義は歐羅巴的世界をまことの世界的世界に轉換せしめる世界的神聖使命の第一歩である。今日大規模に行はれつゝある東亞に於ける事變、歐洲に於ける戰亂はまさに東亞諸國の歐羅巴的世界への從屬からの脱却、古い歐羅巴中心的世界の崩壞、そして新たなる機構と秩序が齎さるべきまことの世界への邁進の交響樂である。

新しき世界的世界は政治と文化を決して乖離的に存在せしめることは許さず、その融然たる結合を要求するものである。かゝる世界の構造は中心と周邊との支配歸屬の關係ではなく、權力の原理を超えた道義的人格的原理であるべきである。民族と民族が相互に獨立性を保ちつゝ國際信義に立つて睦び合ふ人格的交渉こそ新世界の構成原理である。しかも世界的世界の成立の契機に端緒を與へたのは日本民族であり、人格的道義的世界的世界の新體制の理念は多分に東洋的世界觀を要望する事を信ずるのである。

東洋的世界觀は前に考察した如く、宇宙論的世界觀であり、その東洋的なるものゝ粹が日本に集約せられ、綜合せられ力となつてゐる。この東洋の精神を代表し、これによつてそのすべての民族を宇宙論的に包攝し、あるべきまことの新秩序に齎すべきものである。かつて史上に根と花とをみせつゝ、その實を結ぶことのなかつた東洋的世界觀を今や内に充てる力もて深く且つ廣く把持することによつて、まことの宇宙論的世界觀を八紘の字内に敷くこと、これ現代日本民族に負はされた課題である。

この世界的世界の構造は同時にそれに應じて新しい文化を必然的に要求するのである。西洋にはそのギリシャ主義なる生命主義に並行して基督教のヒューマニズムがあり、大體この二つが相結び、交互に作用して文化の傳統的地盤をなし、而かも兩者と共に對自然の關係に於て、畢竟人間本位であるところに共通の一致を見出すのである。この人間本位的なる理想主義が西洋人の骨髓にまで浸み込み、自然と人生とへの積極的態度によつて、よく偉大なる文化を開拓し、世界の生存競爭場裡の優勝者となり、遂に世界史を以てアリアン人種の歷史なりと觀たのである。

この偉大なる文化もその道德哲學では割り切れない歷史的現實に衝突して破壞の兆候を示し、金科玉條と信じた世界觀の根底に疑惑の點が生じ、この爲に未知の世界觀と人生觀との觀點を探すために新しく東洋へ眼を向けたのである。

西洋理想主義の文化は意慾的であり、能動的である結果餘りに對、對、對…(für, für, für)であり過ぎ、又餘りに「それ自身に在る」(an sich)の態度に止まりすぎ、それに對して東洋思想は人間的世界を超えて、宇宙的世界に自身を据ゑ、人間の天命をよく完了し得るとしたことはよかつたが、個人的意慾と人類的意慾との區別を力説すること足らず、享受的態度の中に耽溺低徊して、それ以上の進取的努力を厭ひ、或は認識論的誤謬を持つたりする。吾等は西洋の生命主義の單純さと、ヒューマニズムの見解の狹隘を修正擴大すると共に、東洋思想に人類の抱くべき正しき意慾と積極性とを吹き込み、この兩者の結合によつて新しき生命主義と、超人間的廣さにまで高められたるヒューマニズムを建設すべきである。茲に東西兩文化の結合を新時代に要望する所以である。

この來るべき東西文化の融合は、地理的に統一せられたる世界の形成と步調を合せ、而かもそれは當然の運命である。蓋し、この媒介者は日本民族であり、明治維新以來八十年間この黎明期の豫告たる前奏曲は既に奏されてゐたのである。タウトは『日本こそ一九〇〇年來その傳統たる單純性を以て、陳腐な衣裳をつけた道化芝居から蟬脫せんとするヨーロッパの極めて眞摯な試に、最も大なる寄與を致した國である』と云つてゐる。また『主體から主體を越えて

主體の底に物の眞實に行くといふ日本精神に於ては、そこに何處までも東洋文化の精神が生かされると共に、それは直に環境的な西洋文化の精神とも結合するものがあるのであらう』と、日本の哲學者西田博士が云うたのも全く至言である。歐羅巴的世界から世界的世界への過渡が現代史の課題である。そしてその渦中に立つものは日本である。日本史は同時に世界史である。新しき世界的世界に直面した日本は新しき國家的自覺を以て世界性と綜合せんとしてゐる。その世界性は決して過去の歐羅巴的世界性ではない。それは全く新しい世界性であり、これから新しく創造せねばならぬものである。吾等は此の新しき世界性を帶びた文化を過去の亞細亞文化に求めることも許されず、十九世紀の西洋文化に歸することも認めることは出來ない。それはどこまでも過去東西兩洋の舊き文化を新しきものゝ中へ選擇採用して生かし、決して棄てゝはならない。而して德川時代に一應の生長を遂げ、明治以後新時代に入つた日本文化の十分な意味での創造に至つては、固より今後の問題である。この特殊の國體の內に、在來の文化を準備として、新たな國民文化を創造して世界的世界文化のために寄與貢獻すべきことこそ日本民族の目前の任務である。蓋し他に對して文化的內容的發展を伴はないでは、所謂國體の特殊性も、それは單なる特殊であつて、普遍的價値の承認を要求し得べくもないからである。古き文化を顧みながら新しき文化の創造に參與することこそ、東洋文化と西洋文化とを過去に吸收し、今や世界の歷史的一大轉機に際會し、世界的世界の成立の端緒を開きつゝある現代日本民族に課せられた一大使命である。

第二地區（アジア洲）一等入選者

梁　盛　志

中華民國北京の人、年齡三十七歲。北京國立師範大學、東京帝國大學文學部大學院に學ぶ。河北大學文科教授を經て目下北京國立師範學院及北京女子師範學院の講師の任にある。

日本文化と支那文化

一、日本の支那文化攝取

應神天皇以前における日支の文化關係も、近年日本の考古學者たちの研究によつて漸次判明しつつある。例へば、支那の青銅文化が西日本一帶に影響を及ぼしてゐたことや、樂浪の漢代文化が九州北部にまで波及してゐたこと、さては六朝の文物の如きも日本古代の器物の中に親族關係の見出されるものが少くないこと等それである。[1] それ故日本民族は、その文化の萠芽時代よりして、すでに大陸とは切つても切れぬ因緣があつたのである。儒教は應神天皇の十五、六年（晉の武帝の太康五、六年）に阿直岐、王仁等によつて傳へられ、佛教は繼體天皇の十六年（梁の武帝の普通三年）に司馬達等によつてもたらされたが、これに續いて奈良朝、平安朝初期にもなれば日支の正式國交が開始せられた。舒明天皇の二年（唐の太宗の貞觀四年）より宇多天皇の寛平六年（唐の昭宗の乾寧元年）までの二百六十四年間、遣唐使の任命せられること凡そ十九回、確實に唐に渡り得たものが十三回となつてゐる。盛唐の法制學術や風俗習慣はいづれも日本に輸入せられ模倣せられたものであつた。阿倍仲麿の如きは日本留學生の身を以つて、唐に仕へて二品の官にまで上り、死後日本においても正二位を追贈せられてゐるほどである。安史の亂の時の如きは、軍需品の調

達を遠く日本にまで求めてゐる。これによつても兩國の關係が如何に親密であつたかが分るであらう。鎌倉室町時代には禪宗及び理學が輸入せられ、江戸時代には儒學から印刷術、陶磁、武術の如きものまで輸入された[2]。試みに日本の歴史の中から、もし王仁や吉備眞備、鑑眞、空海、菅原道眞、榮西、義堂、絶海、藤原惺窩、林羅山、朱舜水、隱元、陳元贇等を除き去つたとしたならば、如何に寂寞たるものになることであらうか。これによつても、支那文化の日本に對する影響がどんなものかが知られるのである。試みに日本語の中に含まれた漢語が如何に多いかを思ふがよい。漢字は勿論支那の文字であるが、假名にしても支那の文字から生れ出たものに相違はない。またもし、漢人にして日本に歸化した者の人數と、その文化的貢獻[3]とを考へてみるならば、日支兩民族は、たとひ眞の同文同種ではないにしても、文化や傳統の上の親族關係においては全く切り離すことの出來ないものを持つてゐるのである。

日本の先知先覺者たちは、實に萬里の波濤を冒し、九死に一生の冒險をして支那の文化を輸入したのであるが、これには我々は無限の敬意を表し、この明敏無比の隣人に對して感服する次第である。また、隱元や朱舜水等が日本の朝野から受けた所の優遇の如きは、實に東洋にのみ見られる所の人情美であり道義の美である。また日本人にしても、「鑑眞東征傳」や弘法大師作の「惠果阿闍黎碑」を讀んだことのある人は、これまた支那人の親切な、大きな心に感激しないではゐられないであらう。かくの如く美はしい歴史的關係を持つ隣國は、世界の歴史においてもまことに稀に見る所である。

日本が支那の文化を選擇し消化し改造したことは、更に我々をして敬服措く能はざらしめるものである。支那民族の恥辱となつてゐる宦官や纏足、阿片の如きには、日本人はつひに馴染むことがなかつた。陰陽五行の說や荒唐無稽な道教的思想も亦日本には殆ど影響を及ぼしてゐない。恐ろしく融通の利かない漢字も、日本に入れば假名文字となつて、表音文字としての利便と美觀とを兼ねることになつた。保守に偏し道德の一面のみを見た儒家の倫常名教思想も、日本においては簡單化され、人情化された。消極遁世を以つて印度や支那に害を殘した佛教も、日本においては却つて人生を淨化し、刻苦の精神を涵養する刺戟劑となつた。唐の法律の如きは東亞各國に影響を及ぼしたものであるが、それに對して獨自の選擇を加へたのは只日本だけであつた[4]。支那の醫藥の法は數千年來流傳せるものであるが、これに對して歴史的考察や研究を加へたのも只日本だけである。日本化したいはゆる支那料理や、さては日本化した南畫、日本化した書道、日本化した支那の古風な磁器、日本化した支那の武術（柔道）等々、支那の文物の一つ一つに新しき生命を注入して世界の注目を惹いたのも、やはり日本であると言はなければならない。更にまた、日本固有の神道と儒佛兩教を調和せしめ、西洋の科學と東洋の倫理を調和せしめ、超俗的な犧牲刻苦の精神をもつてよく人間世界の倫理宗教に順應し、さては森羅萬象を究明する科學を持つに至つた點など、たしかに日本の特色とすべきものである。かくの如く、義務あるを知つて權利あるを知らず、犧牲あるを知つて報酬あるを知らず、二十世紀的の生産をなしながら十八世紀的の消費に甘んじてゐる克己心に富む民族は世界にもその類が稀である。支那にも漢や唐の時代にはかうした精神があつたが、日本が今日行つてゐる所のものは正にその古代東亞の精神を復活し、更に一層これを純化し淨化したものである。我々は日本の文化が昇華して世界的のものとならんことを衷心から祈る。何となれば、その成分の中には支那文化の精髓が多分に含まれてゐるから、我々としてもその光榮に與り得るといふわけである。この六十年來、もしも東亞に日本といふものがなかつたならば、漢字の如きは今ははやかのバビロニアの楔形文字と同一視せられ、いはゆる支那の文物の如きはもはや博物館入りをして、現代的意義を失つてしまつてゐることであらう。それは我々支那人としてはまことに恥かしいことではあるが、しかし承認しないではゐられない事實である。そ

れ故、日本が支那の文化を攝取し改造したといふことは、日本の光榮であると同時に、また支那文化にとつての幸運であつて、それは恰も、印度の佛教が支那に傳へられて印度文化の幸運になつたのと同じことである。

二、日本の支那研究の缺陷

明治以前の日本の漢學者は、支那をまるで天上の世界の如く扱ひ、今日の日本の「支那通」の中には支那人など半文の値打もないやうに言ふ人もある。しかし支那を理解するには、よろしく全面的に鳥瞰し、また歴史的に遡つて見なければならぬ。同じく漢人とは言つても漢唐の漢人もあれば南宋末の漢人もあり、明の成祖の下にゐた漢人もあれば、また明の思宗についてゐた漢人もある。支那の文化にもし根本的な缺陷がなく、支那民族にもし重大な弱點がなかつたならば、支那は何回となく亡國と衰亂に陷ることはなかつた筈である。支那文化にしてもし獨特の威力がなく、支那民族にしてもし潜在的な强靱性がなかつたならば、支那は決して幾度か亡びて又興り、或は危殆に瀕しつつも滅亡を免れるといふやうなことはなかつた筈である。日本は支那を隔たること遠くないので、支那を理解することは歐米人よりは容易であるが、但しまた餘りに近く且つ容易であるために却つて一時的、部分的な現象に釣り込まれて正確な判斷を失ふといふ危險性もある。支那は廣大複雜な國であつて、その中には種々の矛盾した形態や性格のものが含まれてゐる。陽貨と孔子とが同時代に生れ、柳下惠と盜跖とが同時に存在するなどはその例である。小説などにしても、清教徒的な「儒林外史」があるかと思へば淫猥な「金瓶梅」がある。朱熹の「道問學」もあれば陸九淵の「尊德性」もある。桑原隲藏博士はかつて支那人の殘虐食人の物語を蒐集して一大長篇を書かれたことがあるが、[5] しかしながら

その反對に、一旦意氣に感じては身を殺しても仁を爲すやうな人物、たとへば日本の小學教科書に出てゐる「吳鳳」の如き人も決してその例に乏しいわけではあるまい。事變前の支那について見ても、口語體の文章に反對する老學者があるかと思ふと、國語羅馬字を實行しようとする農村があり、或はまたラテン化支那語を學習させる工場があるといふ有樣であつた。「蓮歩楚々」として只「オットリ」としたのが取柄といふやうな病的美人も勿論存在するが、また胸を張り自然のままの大きな足をした女博士や女スポーツ家もないわけでもなかつた。「雲を呑み霧を吐く」と形容されてゐる阿片飲みも少數ではないこと勿論であるが、しかし酒も煙草ものまぬといふ新しい人たちも段々增加して來てゐる。日本側が支那のかうした進歩的な青年の心意氣と自尊心（或は面子とも言へよう）を蔑視し輕視した所に、少くとも今回の事變の原因の一つは潜んでゐるであらう。

二千年來日本の漢學者は、支那の文化を攝取するといふ歴史的な使命を果して來た。漢文の訓讀は、日本人が支那の典籍を研究するのに非常な便宜を與へたものである。しかしながら、現代の支那を認識するといふ點では、舊式の漢學者は別にこれといふ貢献もしてゐない。下から上へと引くり返つて讀む方法は、支那の古典を理解するのには相當に役に立つであらうが、しかしあれでは支那の新聞雜誌は讀破されない。たとひ彼等が幾度か支那を漫遊して南北の山水に親しみ、或は古老名士と酒を酌み詩を賦し、筆談を藉りて往事を語つたところで、それは只過去の支那への懷古趣味に過ぎず、最近三十年間の支那を理解するのには何の役にも立たない。或は却つて、歴史的認識と現狀の不一致よりして、夢に描いた世界の幻滅を感ずるに至り、現代支那に對する輕視乃至は憎惡の念を益々强くするかも知れない。果ては日本國内の支那人輕蔑心理に迎合して、歴史の上から支那人の缺陷を描き出し、直接間接に兩民族の誤解疎遠の因を作ることになるかも知れない。それ故、古代の日本漢學者は日支文化の疏通者であつたとしても、現

代日本の舊式漢學者は、もしかすると兩國文化の疎隔を惹起することを免れないであらう。もつともこれは、支那現代の言語文章を活用し得ず、又は活用することを屑しとしないやうな漢學者を指して言つたまでである。齋藤惠秀教授が曾てかう言つた、

「日本には、支那を綜合研究すべき資料さへもない。古代の部は大體あるやうであるが、それと同様に必要であるべき近代のものになると案外にない。一ケ所でよいから、近代支那のあらゆる文獻――單行本、雜誌、新聞、等――の取り揃へてある所があつたならば、各部門の研究者が、それぞれの角度から研究することが出來て便利である。[6]」

これは明らかに、日本の支那研究が古代を重んじ現代を輕視してゐることの證據ではあるまいか。

更にもう一つ、支那を日本に紹介する人々にいはゆる「支那通」がある。この人たちは勿論支那現代の言語文章を利用し得、直接に見聞した所から知識を得てゐる。しかるにこれらの人々は往々歴史の素養を缺き、支那現代の社會文化現象に對しても只その現狀のみを知つてその由來を知らない。またその接觸する所も結局支那社會の或る一つの部門に過ぎず、且つまた最近三十年の日支關係から言へば、彼等の接觸する所のものは必ずしも支那社會の中堅層、光明面であるとは限らず、從つて彼等の體驗し描寫するものによつては支那の正體が摑まれないのが常である。

最近五十年來の支那は、門戸は開放されて何びとの調査研究も自由となり、いはゆる國家社會の秘密といふものは些かもなくなつてゐる。一切の弱點を赤裸々に異國人の前にさらけ出してゐるのは、世界廣しと雖も恐らく支那人ぐらゐのものであらう。國勢は益々弱り、內政は腐敗し、歐米人は輕蔑的な好奇心を以つて調査研究を試み、これを政治的經濟的の或る種の企圖の根據としてゐる。日本も亦いつの間にか歐米人の影響を受けて、一歩一歩と支那人の暗黑面を追求解剖するやうになつてゐる。しかるに、深入りすればするほど愈々細かい事をほじくるやうになつて、事の眞相からは益々以つて遠ざかることになる。何となれば、およそ如何なる民族といへども、聖人もあれば凡夫もあり、また如何なる人間であつても神性と魔性とを同時に持つてゐるものだからである。支那といふ國では寫眞の撮影も旅行も通信も皆自由なのであるから、怪談や奇聞の多いのはむしろ當然のことではあるまいか。

また一部分の日本人は、現代の文學によつて支那を認識することが出來ると考へてゐる。從つて魯迅、茅盾、林語堂、乃至は一部の極左翼作家の幼稚な作品の飜譯までが日本では皆相當に讀者を持つてゐる。しかしながら、文學は結局ただ文學であつて、その中には誇張もあれば歪曲もある。殊に動亂の際の苦悶の呻き聲に滿ちた現代支那の作品においては、その表はす所のものは只支那の社會文化の尖端の一部分に過ぎないのであるから、これによつて支那文化の正體を追求しようとすることは、これ亦部分を以つて全體を代表せしめ、誇張された修辭をそのまま事實と誤認する危險性がある。

我々は支那の歴史をよく理解し、支那の全局面を鳥瞰し、支那の現狀を認識し得る如き隣邦の支那文化研究紹介者を要望する。これこそは兩國の關係を正しい軌道に上せ、東亞の新秩序を建設するのに何より必要な運動者だからである。

三、支那の日本文化攝取

明治維新以來、日本の文化は長足の進歩を遂げ、日本文化の支那への逆流といふ事態が出現した。支那譯された日

本の單行本は二千種以上にも達し、日本語の語彙は洪水の如く支那に流れ込んだ。言語文章は日本化し、字體も日本化し、繪畫も日本化したことは、いづれも隣邦の研究者によつて指摘された所である。[7] まつたく、幾千幾萬とも知れぬ日本留學出身者は近代支那の政治や文化の上の中堅分子となつたのであるから、支那が日本化するのはむしろ必然の勢ひである。支那の建國革命運動は、日本語から重譯された民權自由思想の影響を受けて起つたものである。支那の新文學運動も亦日本の口語文や言文一致、國語統一運動を眞似たものであつた。清朝末年には多數の日本人教師が招聘され、日本の教科書が直譯された。たとひ排日騷動の瀰漫した時代でも、紙や計器、文具などは日本製品を使はないわけにはいかなかつた。果ては抗日の標語を印刷するのに日本のインキ、日本の機械、日本の紙を用ひねばならぬ始末であつた。日本の近代科學工藝文明が如何に支那を支配したかといふことは極めて明瞭であらう。

日本が今日呪詛する所の中國共產黨や共產思想は、支那の土地から生れたものでなければ全く蘇聯から輸入されたものでもなく、大部分は日本文化の畑において育まれたものである。支那において逸早くマルキシズム研究會を發起した陳獨秀、李大釗、戴季陶等は大部分日本留學出身者である。辛島驍氏の指摘されたやうに、現代支那の有名な左翼作家、例へば郭沫若、成仿吾、田漢などはいづれも日本留學生上りである。氏は又言つてゐる。[8]

「一九二八（民國十七）年以後の文學革命時代にもなれば、日本の文壇に氾濫してゐた蘇聯の文藝理論は殆ど翌る月にはもう上海で飜譯が出るといふ程になつた。日本の左翼評論家の議論は支那の左翼文學運動に强烈な影響を及ぼした。中でも平林初之輔、片上伸、岡澤秀虎、青野季吉、藏原惟人、川口浩等の文章は、プレハーノフ、ルナチャルスキー等の文章と並んで、支那の評論家の論說の中にまるで金科玉條のやうに引用されたものである。」

日本は今日では、もはや蘇聯から輸入した唯物思想は清算してゐるが、それが支那に及ぼした餘波は依然滔々として續き、しかもそれは日支關係大破綻の主要原動力となつてゐる。兩國文化關係の複雜怪奇な因緣は遂にかういふ結果を生むに至つたのである。

曾て義和團拳匪の事變の後、支那は誠心誠意日本の指導を仰いだものである。教育文化の各部門においては幾多の日本人教師が招聘された。しかしながら、これらの人々の支那に對する貢獻は至つて平凡なものであつた。眞に學問技術を以て支那人を心服せしめた人は殆ど皆無と言つてよい。やがて革命の勝利、民族主義の擡頭、歐米派留學生の大量歸國によつて、これらの教師たちは次々に斷られて歸國してしまつた。これこそは支那人が日本文化を輕視する始まりであつた。やがて日本の支持する段祺瑞政府の邊防軍が直隸系の軍閥のために無慙にも打倒されるに及んで、日本の支那における威信は遂に地を掃ふに至つた。日本が支那の進步的な青年たちの心意氣を輕視し蔑視したことと相呼應し、互に因となり果となつて爾後の幾多の紛糾を生むに至つたのである。

日本への留學生が玉石混淆であつたことや、日本側がこれらの留學生に與へた待遇も亦日支文化の疎隔を來した重要原因である。宏文書院時代に修業した多數の速成的學生の如きは、日本語も碌に分つてゐなかつたのであるから、日本の新しい文化を眞に理解することが出來なかつたのは勿論のことである。しかのみならず、日支同文といふ考へからして三箇月速成とか半箇年完成といつたやうな謬見を抱き、そのために多くの支那人留學生は日本語日本文といふ研究工具を身に入れて物にしようといふ熱意がなく、從つて日本文化を吸收する能力も亦減殺されたのであつた。且つ又、日本側の營利本位の幾多の教育機關がこれらの留學生に妥協してインチキ手段を弄し、そのため支那人學生のうち腐敗的な分子には愈々墮落を促し、進步的な學生には益々反感を起させるやうな結果になつたのである。歐米に留學した連中はそれぞれ留學先の國のことを自慢にしてゐるのに反し、日本留學出身者の中にはその履歷を口にす

ることを恥ぢるものさへあるが、その主なる原因はこの點にあるのである。留日學生の質と量とは正に反比例的な推移を辿つて來てゐる。而して支那人がこれらの留日學生を從來輕蔑して來た氣持は、間接ながら日本の文化といふものに對する氣持にも影響を及ぼしたことは言ふまでもない。

日本の理工科系の學校は支那人學生の入學に對しては頗る嚴重であるが、政治經濟法律方面は甚だしく放漫である。これは支那人が政談を好んで科學を好まず、空論を尙んで實際を顧みない低劣な根性にとつては正にあつらへ向きである。それかあらぬか、支那五十年來の波瀾萬丈の政爭には常に日本留學出身者が音頭をとつてをり、これに反して自然科學や應用科學方面の研究や發明になると、日本留學上りの人々の業績は殆どこれといふ程のものがない。これは勿論從來支那の政府が留學生に對して何等の政策も統制も持たず、支那人學生が日本現代の文化に對して理解も選擇もなかつたのに起因してはゐるが、しかし日本側が支那人留學生の指導上において純眞と誠意とを缺いてゐたことも亦忌憚なく指摘されてよいと思ふ。

支那が日本の新文化を攝取して更生を謀らうとしたことはすでに少くとも五十年の歷史を有し、將來といへども勿論繼續しなければならないが、しかし過去において日本が支那に何を與へて來たか、また支那人留學生が何を選んで來たかといふことについては、雙方共に反省の必要があるであらう。而して日本の文化が眞に支那の生存改善に資することが出來、支那人留學生がいづれも空腹を感じて日本に渡り、充分に滿腹して歸つて來ることが出來、また支那人が日本人教師を歡迎すること恰も臺灣の蕃人が吳鳳を憶ふが如く、或はまた日本の帝室が曾て鑑眞を迎へられ、水戸の名侯が朱舜水を慕うたやうになつたならば、そこにおのづから日本文化の指導性といふものが確立されるのである。

四、支那人の日本理解の缺陷

日本人の支那研究と比較して見れば、支那人の日本研究は全くお話にならないほど幼稚なものである。日清戰爭以前にはなほ、黃遵憲の「日本國誌」の如きものがあり、當時としては傑作に算へられてよいものであつた。周作人氏の言ふ所によれば、この書の中の「學術志」「禮俗志」の如きは現在でもこれ以上のものはないさうである。[9] ところで日本の歷史や藝術になると、いづれの部門にもこれはと言ふほどの著述がない。支那の最高學府(北京大學)にも日本歷史の講座はなく、日本文學科の學生の數は寥々たるものであつた。前國民政府の中央研究院が研究員を募集した際、少くとも一種類の外國語に通じてゐることが資格となつてゐたが、しかし日本語はこの限りにあらずと註記してあつた。つまり日本語には學術性がないといふわけである。日本人の方では支那古今の書籍を大量に飜刻してゐるが、しかし漢文で書かれた日本の有名な本、例へば最古の「日本書紀」や最大の「大日本史」などは、支那ではその名前さへ知つてゐる人は殆どない。光緒年間に支那の碩儒愈樾が日本人岸田國華の請に應じて日本の漢詩人百數十家の作品の中から四千餘首を選んで「東瀛詩選」四十卷[10]を作つたが、支那にはその刊本がなく、またこれを讀まうと思ふ人さへもない。それ故、過去において日本人の作つた漢文の書物は、支那とは眞に同文でありながらも、事實上は支那人とは何の關係もないのである。更にまた和文系の日本文學、例へば古代の名著なる「萬葉集」の如きも全譯本がない。或は和歌の飜譯は難しいからと言ふかも知れないが、然らば小說はどうかと言ふに、紫式部の「源氏物語」の如きは世界最古の人情小說の傑作と稱せられ、多くの國の譯本が出てゐるのに支那譯だけは未だない。これによつても支那

人がいかに懶けものであるかが分るであらう。

漢和辭典や日華辭典の類はいづれも皆日本人の手に成らないものはない。事變以前には支那の本の中に日本の假名文字を見ることは絶えてなかつた。商務印書館發行の「外國人名辭典」では日本人の名前を全部ローマ字綴りにしてゐる。[11] まして日本の史實や日支の文化關係などになると、支那人の知識の貧弱さはお話にならない。有名な歴史家梁啓超の作「朱舜水年譜」にしても、支那で飜刻された「朱舜水文集」以外には日本の文獻は一つも引用されてない。梁啓超は、獨立、陳元贇の如き人物はいつたい如何なる人間であつたかも知らないのである。[12] 名教授惺之誠の著「中華二千年史」には日唐の交通が記されてはゐるが、しかし空海の留學三年を誤つて二十餘年としてゐる。これは「新唐書日本傳」の誤りをそのまま傳へたものであつて、日本の歴史文獻は全然引證してゐない。また、支那の僧侶で日本に佛教を傳へたものは鑑眞が最初であるとしてゐるが、これもそれ以前に道明、道榮、道璿等があつたことを知らないのである。[13] 甚しきは兒島獻吉郎博士の「支那文學通論」の飜譯者で、彼は藤原惺窩がそも如何なる人物かも知らず、註に未詳と記してゐる。[14] 日支兩國の關係はかくも密接であり、文化上の往來はかくも頻繁であつたにも拘らず、支那の學者が日本の史實に對してかくの如く無頓着であるといふことは、まつたく奇異の感を抱かせられる。

事變以前、南京には「日本評論」や「日本研究叢書」が刊行されてをり、その中心になつてゐるのは勿論日本留學出身者であつたが、しかし彼等は客觀的に日本を研究することは重視せずして專ら主觀的な日本批評に偏してゐた。その蒐集した材料の如きも、やはり主觀的批評に便せんがためのものであつたのである。從つて彼等は俗論を指導し得ず、却つて俗論に指導されてしまつた。早稲田大學出身の龔德柏の「征倭論」や「日本必敗論」の如きは皆俗論に媚びんとする金儲け本位の小冊子であつた。しかもかういふものが當時大いに流行したために、直接間接に群衆の夢想に拍車をかけることになり、引いてはそれが南京政府の誤算となつて、今次の如き一大慘禍を招來したのである。

支那唯一の日本研究機關でさへも、その荒唐無稽ぶりは實にかくの如きものがあつたのである。

支那人留學生たちの考へでは、日本の漢學は支那の受賣りであり、佛教學は印度の受賣りであり、科學は歐米の受賣りであるとされ、從つて最初から日本文化の本體に對して敬意を感ずることがなく、只日本が取次ぐ所の歐米最新最奇の思想學說を仕入れて國に持つて歸り、それで一般の人氣を集めようといふ料簡しかない。さればこそ「無政府主義」、「共產主義」、「友愛結婚」等はいづれも日本を經て間接に輸入されたのである。日本ならば中流知識階級の茶飲み話の一つにしかならないやうな問題でも、一旦支那に入つたが最後、忽ち金科玉條として信仰せられ、紙上の空論はここに於て人間の實際生活に變じてしまふのである。これに反して眞に利用厚生に役立つやうな應用科學は打棄てて顧みられることがない。また日本人の私生活における整頓や、社會の秩序、政治の公明といつたやうなことは、支那にまで影響を及ぼすことが極めて稀である。かの日本化された佛教が、いかに人心の淨化や社會事業の推行に有力であるにしても、支那の僧侶や教界の人々は一向に無頓着で、これを他山の石とするといふやうなことがない。支那人留學生たちは日本現代の文化に對して、その取るべき所を棄て、却つて取るにも及ばぬ所を取つてゐるが、これを日本古代の遣唐學生や現代の在歐學者に較べて見ても、まつたく罪が深いと言はなければならぬ。

長江や大河を見なれてゐる支那人留學生にとつては日本の自然的環境が取るに足らぬものに見え、五千年の歴史を滯した重荷とを以つてしたのでは、どうして異國の文明を深く理解し、充分に收獲を得て歸ることが出來ようか。支那人はすでに早くより、日本文化の正體を見究める必要に迫られてをりながら、而も例の傲慢さからことさらに見て見

ぬふりをしたり、或は故意に歪曲した牽强附會の解釋を下したりしてゐるが、今回の事變こそは正に支那民族に對する最後の教訓であらう。

五、日支の文化的提携

日支兩國の文化的提携を實現するためには、先づ第一に兩國の歴史を書き改めなければならぬ。日支は並行すること二千年、その間には感泣謳歌すべき道義的親交もあり、また互に相反噬した蠻觸の爭もある。これを如何様に次の時代の若い人たちに傳へるかといふことは、日支兩民族の精神界における重大な問題である。イギリスの歴史がもし永久にワシントンを極無道の逆賊として記してゐたならば、決して今日見る如き英米兩國間の協調は望まれなかつたことであらう。日本人は豐太閤を謳歌して仲麿を輕視し、支那人は戚繼光を祀つて朱舜水を抹殺してゐるが、そんなことでどうして精神的の共鳴が望まれようか。事變後支那の教科書の中の排日記事は强制的に取除かせられたが、しかしこれは消極的なことである。積極的に眞に支那人の心を打つやうな效果的な歴史は、果していかなる心構への下に、いかなる人によつて書かるべきであらうか。日本の書籍や新聞雜誌は、日支兩國の過去の歴史及び兩國未來の關係についていかに述べるべきであらうか。兩國の言語文章に通曉する人は日毎に多くなつてゐるやうであり、著作者が一旦筆を執れば忽ち兩國の關係にも影響を及ぼすのであるが、それについては如何やうに敬虔な氣持を以つて從事したらよいのであらうか。

支那に來て働いてゐる日本人指導者たちは日本文化の代表者である。北京師範學院の名譽教授藤村作博士はその講演の際に、自分は朱舜水の精神を以つて支那のために働くのだと言はれた。[15] これは無論支那人としては感謝する所である。しかし、とりわけ重要なことは、支那が必要を感じる所の人材、新支那の建設上缺けてゐる所の人材を供給してくれることである。もし眞に知識と技術とを以つて支那人を指導するならば、支那人は一も二もなく日本文化の光の下にひれ伏してしまふことであらう。それ故私たちは、日本第一流の科學者が大陸進出を試みられんことを希望する。最近兩國では交換教授を行ふとの噂があるが、願はくは支那から日本に赴く教授は支那の歴史或は支那の藝術、哲學、文學等を講ずる人であつて欲しい。もしも單に「支那語」を教へるのであるならば、日本にはもう早くからその人があるばかりでなく、それならば支那第一流の人物を招聘しようとしても到底できない相談である。而して第一流の人物が招聘できないとすれば、どうして支那の文化を代表して日本に好影響を與へることができようか。それ故、日支文化の交流に從事する人々の質的向上といふことが重大な要件である。

日本にはドイツのエールリッヒ博士と共に醫學の研究に從事して偉大な發見をした秦佐八郎博士があり、またフランスのシンヴァン・レヴィと共に佛教の研究をして「法寶義林」を著はしたので有名な人もゐるが、しかし日支間の兩國學者の共同の業績といふものは殆ど見られないのである。デエームズ・レッグ博士が王韜と共同して孔經を飜譯し、或はハーヴァード、燕京兩大學の古典索引や複製事業、中華教育基金社の奬勵に係る歐米名著の支那譯等のことを想ふにつけても、日支兩國の方面は何と寂しいことであらう。東方文化學院には何故支那人の研究員を置かないのであらうか。日本では最近、支那の學術に關する大著、例へば「東洋歴史大辭典」、「東洋文化史大系」、「支那文化史蹟」等が刊行されてゐるが、もし支那人がこれに參加したならば、その内容は或は更に一層充實し緻密になつたこと

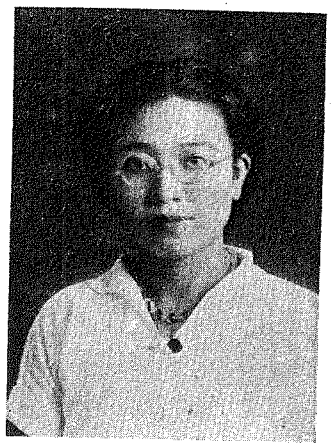
であらう。

日本古代の和文學の支那譯や、支那現代文學の日本譯は、日支兩國の人々が合作するのでなければ滿足な結果は收めがたい。「大魯迅全集」の飜譯の如きはすでにかうした精神を發揮したものである。我々は學術の各部門に亙つてすべてかういふ風になることを希望するが、なかんづく文學上の名著の共同飜譯は特に重要である。文學は人間同志の隔たりを取り除くのに最良の工具だからである。支那人がもし虛心坦懷に日本の明治維新以前の文學や歷史を多少讀んでみるならば、日本は歐化以外には何物もないなどとは決して言はなくなる筈である。また日本人がもし支那の現代文學を少しでも讀んで見れば、支那民族がいかに苦しみもがいてゐるかが了解されるであらう。

支那は引續きどのやうな學生を日本に送つて留學させ、日本はまたどのやうにしてこれらの留學生を訓練すべきであらうか。これは日支の將來の文化關係に對しても決定的な影響を與へるものである。無制限の留學と營利的な教育機構はこれを改めなければならない。留學生の量を增加するよりも、その質を引上げた方がよい。一日の姑息的好感を以つてしては、決して百年の後まで傳はる遺恨を打消すことはできない。惠果が空海をして感激涕泣せしめたのは、彼がその嚴正なる智慧によつてこれを指導し、決して御座なりな御機嫌取りに終始することがなかつたからである。日本は師道を重んずる國柄である。願はくは自國の學生を訓練すると同樣の氣持なり制度なりを以つて異國の青年をも訓練していただきたい。種は必ず實を結ぶ、彼等は日本の大德に對して百年の後までも酬い、否、永劫にまで酬いることであらう。

以上、君子は言を贈るの古語に因み、この一文を以つて日本紀元二千六百年を祝し奉る。願はくは和平の光大地に照臨し、日支兩國共存共榮、永劫かはるなからんことを。

(1) 原田淑人博士「考古學上より見たる日支古代文化の關係」、錢稻孫氏の支那譯本あり、泉壽譯叢の一。
(2) 木宮泰彥氏著「日支交通史。」
(3) 中山久四郎博士「歸化人より見たる日支の關係」――「讀史廣記」所輯。
(4) 友人楊鴻烈氏の「中國法律在東亞諸國之影響」商務印書館刊。
(5) 桑原隲藏博士「支那人の食人肉風習」――「東洋史說苑」所收。
(6) 齋藤惠秀教授「日本文化の支那への影響」の第四篇「今後の支那研究と文化工作」
(7) 右同、第一篇。
(8) 辛島驍「日本文學と現代支那の文學」――「國語と國文學」昭一三・四月號。
(9) 周作人「人境廬詩草附記」――「秉燭談」所收。
(10) 愈樾「東瀛詩紀序」
(11) 唐敬杲「現代外國人名辭典」、商務印書館民國二十二年九月刊。
(12) 拙著「梁任公先生著朱舜水年譜補正」――「明沙閣叢著」所收。
(13) 燕京大學教授鄧之誠著「中華二千年史」中册三三六―三三九頁。
(14) 孫琅工譯「中國文學通論」、商務印書館刊。
(15) 藤村博士講演速記、「國立北京師範學院院刊」第四十八期（民國二十九年五月十六日刊）。



第二地區（アジア洲）二等入選者

郭　道　瀞

中華民國北京の人、年齢二十八歳。旅順にて教育を受け後奈良女子高等師範學校を卒業し在學中皇太后陛下の御前講演の榮に浴した事がある。目下は北京女子師範學院の講師の任にある。（原文は日本語）

日本道德

一

平素私は中國文化の精神を調べながら常に日本文化の精神をも研究し、その兩者間に非常に共通的なる文化の交流點が多くあるのを發見して面白くなり、その爲めに日本精神を深く探求する學習態度になつたのであります。その中に、日本の文化精神の特質を漸次理解するやうになり、眞に世界諸民族に對して獨特的なる優秀性があり、今後の世界的文化に多大の貢獻が可能である確信を得た次第であります。

抑々現代の世界の各國に於て、學術が益々開け人間の知識は進んだけれども、浮華放縱の風習が擴り、輕佻浮薄の氣風も漸次激しく漲るやうになつてゐます。殊に現代の青年男女は服飾の華美を始めとし、萬事に甚だしい驕奢を競ふてゐます。法規を重んぜず、秩序を守らず、責任の觀念、自制の力が薄弱であります。淫猥の欲を縱にし、刹那の享樂に流れて、着實な勤勞を厭ふことなど、蓋しそれは誤つた解放思想に原因するものと觀じます。

更に各國の中には社會問題があり、思想問題があり、生活改善問題があります。國際的には東に西に戰爭が開始しつゝあり、この爲めに各國の國民に相當に强い影響を及ぼしてゐます。眞に世界に新しい文化と思想を新たに形成して道義的人格的原理によつて挽救しなければ、人類の危機までさへ醸される可能性があります。

私はこの全人類のこの時局の中に於て、日本文化が現代の世界的文化の創造に或る暗示と要素を與へるものだと確信し、殊にその道德思想は幾多の特色と價値を包括し、今後の人類の日常生活に或る基準となる規範を齎すことが出來ると考へます。日本文化の精神に就て、その精髄を語ることは非才なる私にとつては到底不可能なことであり、日本の道德に關して平素から研究を纏めて世界の人類同胞に紹介しようとしてゐます。偶々日本の國際文化振興會は皇紀二千六百年を祝賀する爲、世界の各國から論文を募集し、そのお蔭によりまして、こゝに筆をとる好機を得たのであります。それは今日の世界は地理的にまことの統一した世界になり、そのすべてに行詰つた現代に新たな文化の現出を人類が渇望してゐる折、世界の青年特に女性に對して日本の特色ある道德思想を理解させて、新時代を建設する文化に或る暗示を與へ、世界の人類思想に多少の貢獻でもしたい動機からこの論文を掲げた次第でございます。

一

日本國家の根本特性は國體の皇國たるところにあります。

日本國體の最も特異なところは、萬世一系の天皇を絶對の中心として國家の根本組織をなせるところにあります。天皇は日本國家の全一なる組織體の絶對の中心生命にましまし、天皇と國家は全く一體であります。統治權の主體は國家にして、君主は國家の機關であるといふことは日本以外の國々に見られることであつて、日本に於ては統治權が國家に存するのも、統治權の主體が天皇にましますのも全く同一事に屬するのであります。天皇と國民は一體不可分の關係にあり、日本は一君萬民の國であるは全くこの所以で、隨つて君民の利害が兩立することは決してありません。外國の歴史を通觀した場合に生ずる、君主の爲めに存する人民か、人民の爲めに立てた君主かなどといふ疑問は、日本にとつては無關係なことであります。日本國民はこの意味に於て皇國とよばれてゐるのであります。この皇國たることは全く世界に特殊な事實であつて、この特性があるからこそ、日本は他國の文化を輸入攝取しながらも固有的なものをよく保持し、世界一の文化國となり、列强の中に伍することが出來たのであります。そして世界は今や歴史的一大轉換期に際會し、數個の國家群に生成されようとする折柄、その中の重要なる役割を演ずることが出來るのであります。

次に天壤無窮の神勅と日本國性に就て考察を試みませう。昔天照大御神が皇孫瓊瓊杵尊が日本國に君臨し給ふとき、三種の神器を授け、勅して「豐葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就て治らせ。さきく、寶祚の隆へまさんこと天壤と與に窮なかるべし」と仰せられたと、日本書紀に傳へてあります。この他の古典にもこれと同樣のことが記してあります。

古人はこの神勅を「萬代無窮の眞文なり」、「我が國、寶祚天壤無窮の神勅、萬々歴々たる如きは、卽ち六合の間、載籍の傳はる、譯說の通ずる、未だ曾て見聞せざる所なり」等と奉讃してゐます。日本國民は古代のみならず現代のものも此の天壤無窮の神勅を拜誦すると、無限の靈感が胸に迫り日本國民としての大信念大希望が立ちどころに湧いて來るのであります。これは日本國家に內在する根本的本質がこの神勅によつて奥深く日本國民の精神に滲み込まれたからであります。過去幾千年來、日本民族はこの神勅を最高の理想とし至大の光明として之を奉戴し、それが日本歴史を生々發展せしめたのであります。

次には日本歴史に具現せられた日本國家の特性に就て考察してみませう。

日本國家は夙に神武天皇の御世に大に定まり、天皇の御卽位年が日本の紀元となつてゐます。天皇が日向から大和

に東遷せられたのは、天祖の神勅を奉じ、國家統治の聖業を恢弘せられる爲であります。その後皇統を中心として發展し氏族制度を作つたのであります。蘇我氏が強盛となり、非望を抱くやうになると誅滅せられて、其の黨與は「我國開闢以來、君臣の名分の明かな國」といふ大義に服して事は平定されました。次いで行はれた大化の改新には、「天神のよさし奉りしまにまに方今始めて萬國を修めんとす」又「天地の初より君臨の國なり」とて、諸氏族の領有した土地人民を國家に收めて、神勅のまにまに、皇室を中心として皇國の統一に一段の進展を促進したのであります。

奈良時代に僧道鏡が野心を逞しうして國體を變革しようと試みたけれども、和氣清麻呂は「我が國、開闢以來、君臣の分定まれり。臣を以て君とすることは未だ之あらざるなり。天日嗣は必ず皇緒を立てよ」と覆奏し、神勅のまゝなる建國の大義によつて國體が安定せられたのであります。平安時代に入つて藤原氏は權勢を振ひ榮華を恣にしたけれども名分を誤つたことがなかつたのであります。

天下の實權が武門に歸し、平氏についで源氏が鎌倉で覇府を創設したが、常に上に天皇を奉戴して天下に號令しました。武門が權勢を得、覇業を建てたのは、平源二氏が皇室から分派した名族であり、よく皇室に奉仕したからであつて、もし國體を無視すれば、その豪勢をかち得なかつたでありませう。

日本の歴史を通觀すると、世の盛衰、時の治亂があつて、その度毎に他國に於てならば當然國家組織を變更し革命も起つたに違ひない。日本に於ては國體の根本が少しも動搖しなかつたのであります。權門勢家が時に專横を極めたことがあつても、國家、人民は常に上に皇室を奉戴して統治せられ、國體に反するものに對しては、身を殺してもそれに反抗して誅滅しなければ止まぬ程皇室に對して忠義を盡しました。

現今近衛内閣が日本の國家社會に行詰つた習弊を革除し、萬民翼賛の國民組織を確立せんとする「新體制」へ歴史的發足をみたのはやはり同樣であります。これは日本國家の根本的特質によるものであります。

江戸幕府が政權を返上し、諸侯が藩籍を奉還し、全國の制度が一變して、社會の動搖が甚だしかつた時、速かにそれを圓滿に解決し、明治維新といふ隆運を開いたことは世界の歴史に類例を見ざるところであります。これは結局皇室といふ絶對の中心が嚴存し、それに統一せられて始めて可能なことであります。其後、皇室典範、帝國憲法を制定せられ、明治天皇は「皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコトナシ」と仰せられ、天壤無窮の神勅を本として國憲を制定させ給へることを明かにし、憲法第一條には「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と、日本大初以來の國體を明記して立憲政體を確立せられたのであります。かくの如き國體政體は、日本が皇室を中心とするこの事實によつてのみ出來ることで、これは實に日本國家の根本特質であると私共には見受けられるのであります。この國體を堅持した國家こそ世界に於ける獨特の存在と云ふべく、日本民族がこれを根本的準據として文化を創造し發展して、世界人類に貢獻するところがあると信ずる次第であります。

二

日本道德の特質に就てその道德的事實と道德的思想とを相卽せしめて解明を加へようと思ひます。吾等は前に日本國家の特性を概略的に述べたが、この特殊なる國家生活に於て、日本民族は歴史の精華を保有し、豐富なる世界的文化を發展してゐるのであります。この間に於て國民は古來或る規範に準じた日常生活をして來、又同時にその準ずべき思想が働いてゐるのであります。吾等はこの兩方面卽ち道德的事實と思想との相關關係に於て日本道德の基本的特質を考察しようとするのであります。

日本道德がその事實に於て、且つ思想に於て、吾等は第一にその特質として清明性であることを認めたいと思ひます。この清明性は日本民族がその始初に於て固有的にその道德的事實と思想に具現せられてゐるのであります。「隱さはぬ、あかき心を、皇方に、極め盡して」(萬葉集、二十五、五十一)といひ、また「宣命」に「明き淨き、直き誠の心を持ちて」(文武天皇、元年、八月)といひ、『書紀』神代紀に、「素戔嗚尊對曰、吾、元、無黑心云々、天照大神、復問曰、若然者、將何以明爾之赤心」(上廿二)といふ。日本上代に於てその道德の基準の一つにこの純眞なる明き心と清き心があつたことを見受けられるのであります。こゝに注意すべきは原初に於けるこの明るく清きものは、その最も基本的なるものは心に結合されてゐるといふことであります。この點より原初に於ける日本の道德思想は可なりに唯心的なるものであり、精神的なものであります。『神道五部書』に「無黑心以丹心、清潔、齋愼、左物、不移右、右物不移左、左左、右右、左歸右廻事、萬事違事、太神奉仕」(倭姫命世紀)。この清明の心は、神に直接的なるものとし、また人倫の間を規定する道德の基準となつたことは、日本肇國以來三千年の道德を貫く根源的なるものとなつたのであります。この明るき清き心は實に日本上代に於ける道德の著しき特質であります。そしてこの赤き清き心を德として表はれたるものは卽ち正直であります。五部書にはこの正直のことに關して、神人合一、心卽神に於て、正を本となす實踐道德を極めて明かに規定されてあります。吾等が北畠親房の『神皇正統記』を讀んだ時、實踐道德の原理として正直のことを最も基本的なるものとして强調してゐるのを見受けます。「天照大神も唯正直をのみぞ心としたまへる」(卷二應神天皇の條)と正統記にいつてゐます。親房によれば、實踐的に正直を守るとは、人心の根元、神明にかへることであり、この原理によつて支持されてゐるのであります。印度、ユダヤやカトリック等の宗教思想に於ける如く、宗教の本質は、あらゆる世俗的なるもの、人倫的なるものの諦斷と超脫を意味する如きものではなく、日本民族のもつ道德思想は同時に神に對する關係を意味するのであります。この思想は日本民族の世界觀にも表現されてあり、今後の世界的思想の創作に當り多大の暗示を與へるものと信ずるのであります。日本の道德觀念はたゞに人倫の相互關係に限るのみではなく、神に對する關係を含み、天に對する道を含み、宇宙に對する態度を含むのであります。道德と宗教は相互に矛盾する隔絕の關係にあるよりも、その道德が宗教的なるものを含む程に深くして根源的なるものであります。この意味に於きまして清明の心、清純の心は、神に對する心であると同時に、人間相互の人倫關係を規定する基本的態度であります。この心こそ日本道德に存する基本的なるもので、君に對する忠と親に對する孝の德目が自覺される前に、日本民族に廣く深く存したものでありました。

大和魂といひ、日本精神といふものは、日本民族が原初に固有したこの清明の心に外なりません。「清々しい御國心」に外ならないのであります。大和魂は、多く明治維新以後、對外的に民族の危機が自覺され、激情的に發せられた言葉であります。日本精神といふのは、物質文明に對して本質的なるものの覺醒により生れ出でた概念であり、しかも物質から遊離し抽象されたるものではなく、物質を貫徹して克服した具體的なる力をいふのであります。そしてこれらの精神的態度は、近來に用ふることはげしき「皇道」なる言葉で適しく表現することが出來ると思ひます。德川時代、藤田東湖、長谷川昭道等によつて旣に提言されたこのことばは、何よりもこの清明の心を心とし、この心と精神に實現せられたる、歷史の自覺をもちながら、國家に於て實現せらるべき皇國の道を意味するものであります。

かくしてこの清明なる心、清純なる心、正直なる心は一面には神道的であると考へられます。清明なる日本道德は、忠君、孝親に限るのみでなく、神にも直接的關係を持續し、その敬神といふことに於ては神道であると言はれます。日本民族が神に對する態度は、單に超越的にのみ限らず、國家生活に於ては、臣民の道となり、國民の間に於ては人

倫となる、こゝに日本道德の獨特なる特質が含まれてゐるのであります。

清明の心が日本道德の事實に存した原本的なるものであると共に、それの思想的に自覺され表現せられたる神道は、古典に早く之をみることが出來ます。

國者之神國也、道者是神道也、國主者是神皇也、祖者是天照大神也、一神之威光、遍照百億世界、一神之附屬、永傳之乘王道、天無二日、國無二王（唯一神道名法要記）

と古の神道研究家が道破し、或は

神は卽ち天皇なれば、神の道とは天皇の道なり。……そを二途と思つるは戎意なり、……抑神道は天人唯一也、神皇一體也、祭政一致也、……崇敬神化以布教令、故謂之神道也（鹽土傳）

と斷定した所以であります。故に豐臣秀吉は明使に答へて、

夫日本者神國也、神卽天皇、天皇卽神也、全無差（中外經緯草稿卷五）

と宣言して日本國家の特色を發揚してゐます。

日本は皇國卽神國で、北畠親房卿が大日本は神國なりの宣言をしてあります。西洋の學問上の術語に直して云へば一種の神政政治國家であると稱することが出來ます。今上陛下御卽位の際「倫敦タイムス」紙は此點を說明して、

日本國の天皇はその臣民から言へば、單に國家の元首に在すと云ふ丈のことではない。それより、もつともつと以上の位置を御占め遊ばして居るのである。勿論政治上から云へば立憲國の君主に在すのではあるが、宗教信仰の上から云へば、日本の天皇は御歷代皆君にして又神事を司らるゝ祭主に在すのである。日本の皇帝はその國民に代つて御歷代その國家及び皇祖皇宗の神靈に事へられる祭司であらせられるのである。先づメルキゼデク型の國君と申せば宜しからう。

と述べた所以であります。

日露戰爭直後に意見を發表してをる者に、ロシヤのウイッテ伯は曰く「日本の愛國心は、從來熱誠以て鍊成せられ、歷史に顯はれた最高の彈力と相成り、今や總ての利害を超越し、……宗教の如く人性に勝ち、生存慾に勝つに候。政治的國家が、靈性的根柢に立てるを以て、其愛國心や、宗教と交互錯綜し、分つ可からざるに至居候。日本が驚くべき獻身的愛國心に依て、現今の地位に登つたる如く、此の傾向にして、日本の特質として、續かん限り、日本は尙も繁榮す可く候。」……日本の忠君愛國心が、宗教の領域に迄入り込んでをることを、外國人ながらも能く洞察してをると思ひます。

日本民族の道德思想に於ては、神は超越の異質的存在ではなく、存在の根源的なるものとして無限性と威敬の對象に絕對化されたものであります。そしてこの根源の實在と現實の存在を貫くに清明の心が存するのであります。神は清明の心の本源であり、人間の本性に清明の心が宿り、この心に從ふことこそ、自らの自己實現であり、神の道を實現し、神を祭る所以となるのであります。日本道德思想に於ては、神道は決して局限された宗教ではなく、國民の實踐すべき道德であり、また國家に於て顯現すべき政治の原理であるのであります。更に淸き明き心は日本民族に固有的なるものであり、あらゆる道德の根源であり、後に來るあらゆる生活內容、思想的體系に於て、常にその原理として存してゐます。この淸明性は健々しき勇氣となつて外に表現し、正しきものを守る熱情となつて正統を守る傳統を千古に保持する所以となつたのであります。

四

日本道德の事實及び思想に於てその第二の特質は直觀性であることを指摘したいと思ひます。それは日本民族に固有する清明の心と共に、理論的概念にあらずして直接的であり、洞見的であり、諦觀的であり、洒脫的であることを意味します。この特質を啓培したものは、固より佛教的思想であり、民族化し、國民化せられた佛教思想は、全く日本道德の事實と思想の大切な要素となつてゐます。

佛教はその起源に於て狹固的な低俗的なるものではなく、超民族的なるものとして東洋諸國に取入れられ、遂に日本に迄も傳來したのであります。その發展過程に於ては、著しく理論化され形而上學化され、日本に傳へられた最初のものは抽象的、理論的、煩瑣的、超越的であり、實踐的には消極的な小乘佛教でありました。この佛教は綿密的な分析理論をもち、その背景に絢爛な大陸文化があり、更に優美な藝術品を伴つて日本に輸入せられたのであつて、日本民族がそれを歡迎受容したのは寧ろ後者の力によるのであります。けれども日本に實質的に受容せられたものは後に傳はつて來た大乘教の思想でありました。その教義を攝取するに當つては根本的に固有な解釋によつて可能であり、結局行的、實踐的、道德的に轉釋し、特に國家的意義を强調したのであります。このことは佛教思想の最初の理解者であり、日本佛教を確立した聖德太子の態度によつて十分に之を知ることが可能であります。太子の「法華義疏」は當時文化の進んだ支那先人の碩學に反して、「常好坐禪、在於閑處、修攝其心」の小乘的修行を排し、飽くまで行的意義に解釋せられたことを見ても知るのであります。「諸惡爲すこと莫れ、諸善奉行せよ」といひ、「和を以て貴となす」等は佛教思想を道德的に解釋される根本的表現であり、「事大小なく、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寬なり。此に因つて國家永久にして社稷危きこと勿れ。」「私に背きて公に向ふは是臣の道なり、」「人尤も惡しきもの鮮し、よく教ふれば之に從ふ」と斷ぜられる所に、佛教思想の國家的實現を期した根本的なものを見られるのであります。これを要するに佛教はその最初に於て行的に理解され、道德的に實踐し、國家的實現に受容せられたことはまことに日本佛教の特質であります。

平安朝に至り、日本佛教は數人の宗教的天才により、益々日本化せられ、慧よりも信、教よりも旨に、證を行に於て得んとする特質を强め行き、日本佛教は實踐的性格を有し、行的意義の道德に歸したのであります。日本佛教の思想的推移は次第に全民衆を無差別に內面化し、それぞれの現前に於て易行化する日本民族の簡易性的傾向を迎つて來たが、しかしその根柢に尙一の普遍的眞理の諦觀と、形而上學的觀念から、超脫的傾向を潛めるやうになりました。人間世界に於ける本質的の平等觀、形而上學的無に窮極するものとするより來る現實の空觀は、これに根本的な特質でありました。これよりすべての生活に於ける洒脫の風格と、各自の如實の刹那、如法の機緣に於ける獻身的な熱情は、國民の道德的特質となつたのであります。鎌倉時代以來、佛教的思想の影響を多分に含んで發達した武士道、文學、藝術に於て固有の結晶を遂げた幽玄の思想はみなそれによるのであります。

五

日本道德の第三の特質はその實踐性であることが考へられるのであります。日本民族は現實的性格を包含してゐることは學者の意見でも一致してゐます。道德はその本質に於て實踐的であるべきであるが、他民族に於ては現實的超脫を美としたり、單なる觀照を價値と認めたり、或は理論的に流れて主知化したりすることはあることで、それに比

して日本民族は著しく現世的實踐的であり、道理理論よりも、その行爲に見るべきものがあります。

日本道德はこの實踐的性格を著しく顯現してゐた爲、それが積極的、現世的、國家的、經世的なる結果を招來したのであります。この實踐性は日本民族が古來から固有したるものであるが、それを啓培し、陶冶し自覺し思想化したのは特に儒教によつて行はれたのであります。和魂漢才と申されてゐるが、儒教は單に文字と才筆を日本民族に與へたのみでなく、その道德的思想を體系化し、自覺的なる實踐に導いたのであります。日本固有の清明心に五倫五常の德目を與へ、忠孝の大義を國民に確立するやうになりました。

論語や孝經は日本民族に大きな影響を與へたことは周知の事實であり、宋學は建武中興の精神的動因をなしたものであり、北畠親房の生涯を貫いた大義名分の思想は宋學の研究によつて得られたものであります。朱子學に比し根本的に內心的實行的である陽明學は中江藤樹によつて日本民族に固有する神道と結合して圓熟したのであります。朱王の學が理論の末に走つたことにより、更に儒教の眞義を孔孟の原義にさぐらんとした古學思想は、伊藤仁齋と山鹿素行によつて行はれ、朱子學をとりつゝ終に神道說に結合したのは山崎闇齋と淺見絅齋であります。これらの人達によつて日本民族に儒教的精髓を吸着せしめ國民精神を大いに振作したのであります。

武士道に於て武士に發達した忠誠、信義、剛毅、廉潔の道德は、うちに神道の淸直と佛教の諦觀を堅持しながら、特に儒教的實踐性に長じたことは明かであります。次に日本道德の實踐的性格はたゞ政治的關心をもつのみでなく、經濟的實行に徹底する思想と實行をもつことで、二宮尊德に於ける、三浦梅園に於ける道德と經濟との完全なる合致を要求し確信し、實踐する思想は世界思想中にも價値の大なるものがあり、今日に於ても多分に日本國民に影響を與へてゐるのであります。

六

日本道德の第四の特質はその綜合性を擧げ得るのであります。日本道德は前述の通り、その民族に固有なる淸明性を保持し、その上に歷史的に儒教の實踐的性格と佛教の直觀的特質によりまして綜合的特色を帶びたのであります。しかしこの綜合性を著しく助長せしめたものは歐米の科學思想であります。儒教や佛教は長期間に亙つて日本に傳來し、咀嚼され、しかも日本固有的なるものと同質的であつたが、歐米思想は全く世界觀、生活態度の異るものであるが故に、甚だしく異質的なものでありその交涉の期間も僅かに半世紀であります。

日本民族が歐米より學んだものは、主として自然科學的知識と、歐米文化に於ける精神的態度であります。前者の根底となれるものはその數學的思惟訓練とこれに基く量的世界觀であり、殷盛にして效果的なる物質的機械文明とこれによつて却つて人生と社會に生じた弊害に卽して起つた唯物史觀とであります。歐米の精神的態度とはその多彩にして精密なる哲學思想であり、生活と實踐に卽しては基督教的教養であります。基督教に於ける內的純潔さの强調は日本民族の淸明性に一致するところがあつたが、總體的にそれが日本民族に與へた影響はさほど根本的ではなかつたのであります。日本人心に深き共鳴を割合に多く與へたのは福音派の現世的にして自力的なる要素の優れるものであり、その理由は、佛教に於ても他力門よりも自力門の方が道德的見地からは日本民族の內的傾向と價値感を多く持たしむるのと相似てゐるのであります。

日本民族は歐米の科學に對しても基督教に對しても十分に之を受容し咀嚼し同化し包容する力量があり、しかも日本の固有的なるものを變容することなく、却つて外來のこれらの思想を綜合しこれを自己の內容にしてしまつたので

あります。日本人は西洋思想を學ぶことによつてまことの綜合的なる自覺に達し、西洋思想の綜合を學んだよりも、むしろ西洋思想によつて、世界的內容の受容を一先づ完了し、終に西洋思想に對して綜合的なる實を結んだのであります。このことは今後に於て、日本がその特自なる文化史的意義を發展せしむる段階に達し、世界の新文化に多大の新しき意義を齎すものでありませう。

七

世界は個物的多と全體的一との絕對矛盾的自己同一なるものであります。歷史的現實の世界は時間的に空間的に矛盾的自己同一なる關係を保ちつゝ無限の方向を有するものであり、しかもどこまでも創造的世界でなければなりません。その創造的世界の中に於ては、個物的多が相互に對立し矛盾的自己同一でなければ創造があり得ないのであります。こゝに於て民族といふものがなければまことの創造がなく何等の歷史的形成も現はれない。世界は個物的多としての民族が對立することによつて文化の創造があり歷史的時代を作ることが出來るのであります。民族は國家を形成しその道德的主體となるのであります。

かゝる世界に於ける個物的多としての日本民族とその形成されたる國家は前に述べた通り、他の國家に比してまことの國家であり、そこで文化の生成發展が行はれるのであります。その國家に於ては地理的環境と民族的性格により中國五千年の文化の粹を採り、印度三千年の思想を保存し、そして歐米文化の粹を虛心に採取して、これを客觀的に批判し、しかも自らの始源を失はず、この本源的なるものが、この綜合の原理となるに適しきものであり、建國二千六百年の今日に於て世界的內容を包含した豐富なる日本文化が形成されたのであります。その民族精神は雄々しきものであり、

海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍
大君の　邊にこそ死なめ　顧みはせじ

とは古代から存した大義、大至誠心であり、此の奉公の心は戰爭も平時も同じであります。

その歷史的發展に於て、社會形態が行詰る度每に日本はいつも皇室に返り復古といふ形をとり、しかも昔の制度文物を採用するのでなく、新しき世界への發足を意味したのであります。今日、世界的大動亂の渦中に於ける日本が、近世日本文化の內面的行詰りに際會し國家社會に一大革新の時期に迫り、近衞內閣が打建てた國家の政治的經濟的機構の「新體制」への邁進は、他國であるならば、同一民族間に必然に演ぜらるべき流血の慘劇も起ることなく、今迄に行はれた歷史的革新と同一の原理に從つて行はれるのであります。こゝに日本民族が特殊性格の國體をもち、國民精神に文化の發展に獨特の制約を與へたのであります。

今や世界は歷史的一大轉換期に際會し、數個の國家群が形成されようとしてゐます。一と多との絕對矛盾的自己同一の世界はその歷史的發展過程に於て、民族と民族が對立し鬪爭をどこまでも演ずるであらう。しかしその鬪爭はただ相互自滅への鬪爭ではなくて、歷史的創造に於て一となり、歷史の進步は常に悲劇的であるといふ傾向をくり返してゐるのであります。この歷史的大轉換期に遭遇する明日の世界は、數個の國家群を基礎とする政治經濟文化の新たなる創造を必要とするのであります。

抑々日本の文化史に於て亞細亞の世界に直面した日本文化の形成期を早くから終り、歐羅巴の世界に直面した新たな日本文化を形成する時期をも完了し、今や歐羅巴的世界が崩壞し始めて新たなる世界的世界の建設せられ始めた現

代にあるのであります。日本の文化史は明治大正の時代迄に、東西文化の精粹を輸入攝受し、自己の固有なる原理に於て綜合同化せられたので、謂はゞ進取的ではあるが受動的形態に於て日本文化の發展が促されたのであります。しかし今や日本文化の內容に全世界の文化的要素を包含し飽和し、この豐富なる日本文化から新に世界に對して、逆に積極的なる能動的形態に於て日本の文化的意義を顯現しようとしてゐます。現今は丁度その胚胎期であり、否その前奏は既に行はれて居り、歐米諸國の日本文化への積極的關心と文化的提携、亞細亞諸民族の日本への留學と日本文化の積極的攝取等は悉くこれを實證するものであります。現今はまことに世界史的轉換期と日本史的轉換期が同時に行はれつゝあるのであります。こゝに於て吾等は日本民族の世界に於ける使命の重大性を認識せしめられるのであります。

世界はどこまでも絕對矛盾的自己同一なるものであり、そこに於てある個物的多は絕對矛盾的自己同一として作られたものから作るものへと世界は自己表現的に創造して行くのであります。日本道德思想の根柢にあるもの、例へば親鸞の自然法といふ如きことは西洋思想に於て考へられる自然ではなく、それは事に當つて己を盡すことであり、無限の努力がそこに包まれ、しかもその努力そのものが自己のものでないと知ることであります。即ち絕對矛盾的自己同一として我々の自己が個物的多として全體的一に於てあるのであります。それは又道元の所謂「佛の命」といふ絕對的矛盾的自己同一なるものであり、眞の道德的行爲は自己の世界の中に於てのみ起るとされてゐるのであります。日本民族に考へられてゐる眞の道德的行爲は義務の爲の義務ではなくどこまでも知本報恩であり、人間的存在の本質は歷史的で社會的創造であり、道德的實踐の目的はこゝにあると思惟してゐます。歷史的制約のない單に空間的なる橫の世界に於ては人間の道德は唯合理的と考へられ、十八世紀の啓蒙時代的人間形態はそれであり、カントの實踐理性の倫理は、歷史的にはかゝる道德の完結であります。橫から縱に世界が歷史的歪を有つて來た時、人間行動の中心は主體にあると考へられるやうになり、これが十九世紀に於ての帝國主義的人間形態であり、かゝる人間形態がヨーロッパを今日の鬪爭時代に導いたのであります。ヘーゲルの倫理哲學といふのは、かゝる時代の道德を表はすのであります。こゝに於て東洋的なる日本道德の根本的理念は西洋のそれと異なれるものであります。日本民族はこのやうに絕對矛盾的自己同一の世界に於ける個物的多として、その獨特の國體ある國家に於てまことなる民族として歷史的に創造的操作を成し、こゝに日本的全體主義があり、天壤無窮、八紘一宇の思想を生じたのであります。日本民族的個性の覺醒といひ、將に世界の四大國家群の一たる東亞共榮圈に於ける主力の自覺といひ、日本の地位と使命によることあるべき世界の姿の要求といひ、これらの根源的自覺は日本民族に於て極めて近時のことに屬し、みなこれ現代日本生活の道德的理念のこゝに集約し底止するところと云はねばなりません。

第二地區（アジア洲）二等入選者

サクマル・ダット

印度ベンガルの生れ、年齢四十九歳。カルカッタ大學にて教育を受け、英文學を專攻した。哲學博士の學位を有す。現在デリーのラムヤス・カレッジの校長兼デリー大學英文學講師の任にある。